

# 芸術資源循環センター

2022 年度活動報告

芸術資源循環センターは、SDGs 時代の芸術大学における、「不用物とされるもの」(資材・物品など)とそれらにまつわる記憶や技術について、循環経済(サーキュラー・エコノミー)の観点から共有・再活用することの意義とその方法について研究しています。循環経済は来るべき経済活動のあり方として注目されていますが、本研究はそれを芸術領域において実装する可能性について探求するものです。

具体的には、2023 年の移転を予定している京都市立芸術大学において、排出される不用品や資材を「沓掛キャンパスの芸術資源」としてとらえ、それらに関連する記憶や技術とともに循環させるネットワークを「芸術資源循環センター」という名の活動として構築することを通じて、新キャンパスを「資源循環型の芸術大学」として稼働させるためのプロトタイプを設計・運用し、その将来的な実現可能性について検討しています。

2022 年の活動として、京都市立芸術大学が保有する資源の管理や運用、廃棄の仕組みを調査しました。またそれらを大学事務局や京都市とともに活用する方法を、学生研究員も交え、複数の試みで行ってきました。

プロジェクトリーダーである副産物産店 [1] (矢津吉隆、山田毅) は、小山田徹氏(本学彫刻専攻教授、本プロジェクトメンバー)の保有する小屋を再活用し、場としての芸術資源循環センターを制作しました。教員や学生からの相談も何件か受け、資材の提供なども行いました。また京都市と共に「アートサーキュレーション 2023」と題して、京都市が保有する資源の活用に向けて模索もおこなってきました。今後、2023 年のキャンパス移転に向け、大学全体として廃棄物が大量に排出されるタイミングを前に、循環の仕組みを構築していく予定です。

学生研究員・神林優美(本学構想設計専攻 M2) は、音楽領域における芸術資源の保存と活用についても見直し、それらの新しい活用や循環の方法を考えながら、これからの芸術のあり方を研究しています。本年は使用されていない楽器や廃棄される楽器の活用を目標に、楽器の回収を始めました。神林は自身の活動として、2021 年 4 月に結成した「副産物楽団ゾンビーズ」では、壊れてしまった楽器や使われなくなった楽器の音を鳴らし蘇らせる活動を行っています。まだ音は生きているけれど、アンデッドな状態の楽器を“ゾンビ楽器”と捉え、それらの楽器がかつて鳴らしていた音や楽器の周りを取り巻く人々の風景を再び呼び起こしたいと考えています。大学移転後、空っぽになった沓掛キャンパス音楽棟を大きなゾンビ楽器として捉え、建物自体の音を鳴らすことをゾンビーズで密かに計画しています。

学生研究員・鳥井直輝(本学プロダクトデザイン専攻 2 回生) は「そうきそ循環センター」の実施と「資源循環アプリ」の提案を行いました。「そうきそ循環センター」では、本学一回生総合基礎実技の授業内の制作にて、学内の芸術資源を循環させるシステムを提案し、活用してもらうことで芸術資源の可能性を検証しました。

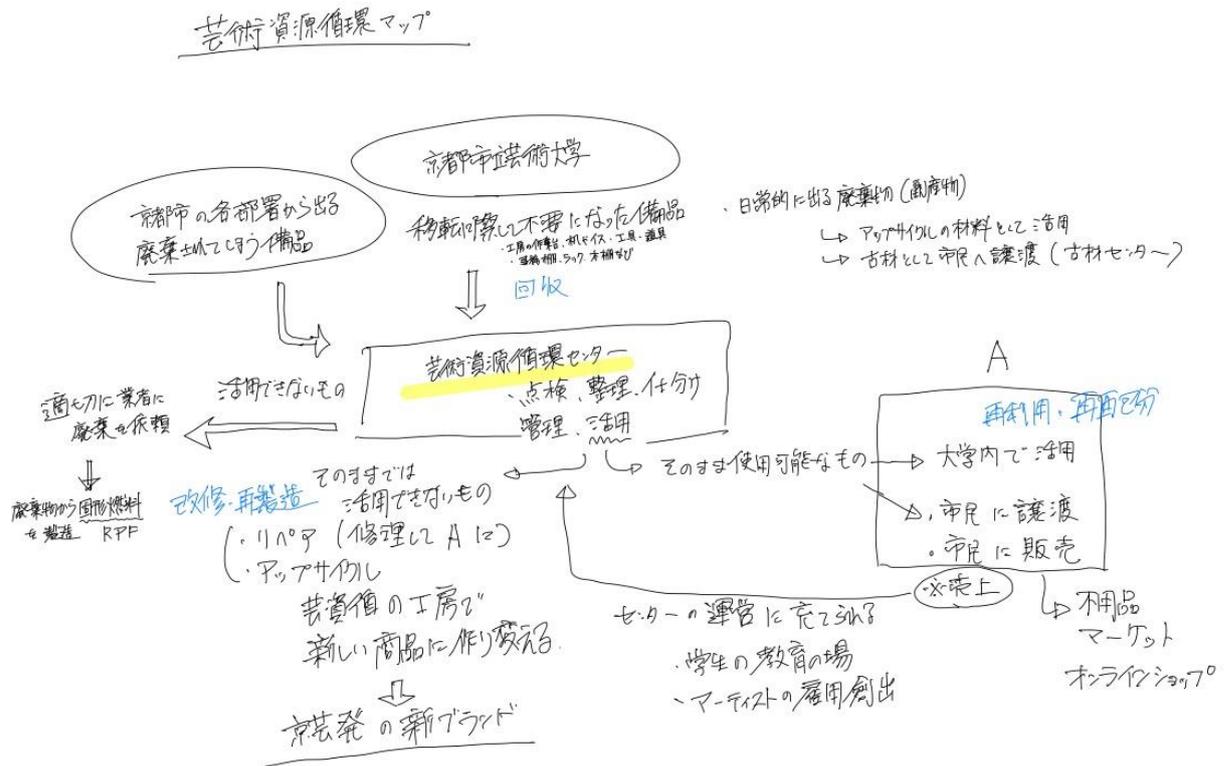
「そうきそ循環センター」の稼働内容は、① 各専攻から芸術資源を大学会館横の拠点に集める、または専攻内に芸術資源のフリースペースを設置する② 集まった芸術資源を掲示板・SNS にて共有し、循環を促進させる

この 2 つを実践していく中で、学内の芸術資源がよく出る拠点マップと資源一覧を制作した。またこのデータから「資源循環アプリ」のモックアップのデザインに取り組みました。

山田 毅・神林優美・鳥井直輝

[1] アーティストのアトリエから出る魅力的な廃材を "副産物"と呼び、回収、販売する資材循環プロジェクト

ト。作品の制作過程で副次的に生まれてくる"副産物"は、アトリエの片隅に置かれいずれは捨てられる運命にあったモノたちです。それぞれの作家の感性を帯びた作品未満のそれらのモノたちに敢えてスポットを当てることで、ものの価値や可能性について改めて考える機会をつくりたいと思っています。主な展覧会はやんばるアートフェスティバル 2019-2020 (沖縄)、かめおか霧の芸術祭 (京都) など。京都を拠点に活動。



芸術資源循環センター / ロードマップ